

から存在した城下町商人の船主（町方船主）と、全国的経済の成立の中で、元祿・享保期に台頭した特定沿海村の船主（浦方船主）、および近世後期の一層の経済的發展下に丹後機業を背景として、天保期に勃興した縮緬問屋の船主に三分して考察してみた。

ところで、丹後海運業の支配的勢力は大型船を多数擁した北前船主—全国的海運業者であった町方船主、縮緬問屋船主等の商人船主であり、浦方船主は買数こそ多いがその殆どは小型船の直船頭として、丹後を根拠とした日本海沿岸の地方的回漕業者に過ぎなかった。このことは、他地方においては浦方船主が多数の大船主を輩出して、圧倒的勢力であったことと比較するとき、丹後海運業の問題点として今後に残された研究課題であると思う。

使用記録

近藤家文書（竹屋町） 竹屋町区有文書、西神崎区有文書 糸井文庫 下村家文書（加悦） 磯田家文書（由良） 村田家文書（市場） 東稻葉家文書（網野町中川正哲氏） 但馬国諸寄御客船帳（柚木孝氏より教示） 但馬国今子浦船番所記録（同上） 船絵馬（由良村の金刀比羅神社、水無月神社）

照国神社、神崎村の湊十二社） 足立政男 氏論文（立命館経済学）

■ 地方史研究 について

藤田 欽也

私は生れが舞鶴であるために、舞鶴の祖先の人々の生活について知りたいと思う。舞鶴から離れて住んでいると、舞鶴という言葉をさくだけで懐かしいものだ。私は数年前峰山に住んでいたが、舞鶴に帰れば地方史をやるうと思つていた。その後帰つてきたが、研究らしきものは何もやっていない。第一、古文書に記されたくづし文字を見るだけでやる意欲を失つてしまふ。しかし、舞鶴に生れ、その地域社会に住んでいる以上、地域住民の生活上向のためにも数年前に有志で結成された地方史研究会に末席をけがしている次第である。私はここで、地方史研究会の発展のために、一、私の期待というか夢を記したいと思ふ。

先づ第一に私が世界史を教えているせいで

六月、朝鮮戦争の勃発に続いて、八月にはマツカーサーの命令で警察予備隊が設けられると、舞鶴では米軍に代つて予備隊員の姿が見られるようになった。その後幾多の変遷を経て現在では海上自衛隊が舞鶴には存在し、舞鶴の性格の一面をあらわしている。世界史的にみるならば、これも現在の米・中の対立と切り離しては考えられない。

第二に望みたいことは、庶民を中心に地方史研究はなされるべきである。確かに「日本の歴史」十三巻（読売新聞社発行）のまごめにある如く、民衆が政治の舞台に進出したのは戦後であるが、それ以前でも生産を営み、社会を動かす原動力となつたのは民衆であらう。とすれば、原始、古代から中世、近代に至るまで庶民の生活を中心にみていく必要がある。ただ史料の制約のため、充分事実を明らかに出来ないというらみはあると思う。しかし江戸時代においても田辺藩の藩庁史料、農村における庄屋史料などみてゆく中で領主と農民の階級関係、当時の農民の広い意味での生活が明らかにされるであろう。この点、「歴史地理教育」一一五号で三好昌文氏の「地域社会の歴史教育」は参考になる。彼はこの中で「地域社会の歴史的研究とそれにもとづく

歴史教育は、地域社会の歴史的運動とその実践的課題とより離して考えることは出来ない」として、すぐれた実践記録を記されている。

第三にのぞみたいことは地方史研究の成果を広く国民に定着させる問題である。具体的にいふならば地方史研究で明らかにされた成果を地方史料として歴史教育の場で利用することである。地方史はいわゆる懐古趣味ではないけないし、お国自慢であつてもならない。矢張り、私達が現在当面している諸問題を解決する手段として過去をふり返るためにこそ地方史研究はあるのだと思う。従つてその目標を達成するための具体的な郷土資料（地方史料）が是非とも必要であるし、歴史の授業でこれを利用出来るようになればと思う。これについては、同じく「歴史地理教育」一一八号で岩手県イサワサールの人々が、「歴史学習のための郷土資料（近世）」として、目次と一部内容を紹介されている。追々充実するとして、始めは簡単なものでもいいから一応まとめるのはどうだろうか。

例えば室町時代の下地中分の状況や領主層の土地所有関係が不完全ながら、「丹後国諸庄御保総田数帳目録」（長祿3年検注）で分る私のような、地方書もろくに読めないもの

もないが、歴史が現在の諸問題を解決するためにあるとするならば、特に地方史の中でも近・現代史を重視すべきであると思う。その場合、大切なことは世界的関連、特に東アジアとの関連を忘れてならないことである。一地方の局地的な出来事も、世界の動きと密接に結びついている。この点について、十数年前に出版された「日本歴史講座」（河出書房）八巻の「地方史研究法」の中で、古島敏雄氏が「今日においては、如何なる地点においても、生起する事象は世界の運命と切り離されては存在することができず、従つてその中で生活する人々の直面する問題も、その人が意識的に現実を回避することさえなければ、その持つ問題そのものは必ず世界との動きに關係してくる」と述べておられるが、私も同感である。将来の舞鶴の繁栄と地域住民の生活向上のために如何にあらねばならぬかと考える場合、世界と日本の動きの中で、特に明治以後の舞鶴の歴史をふり返つてみる必要があるとならう。軍国主義国家として大陸へ力を伸していく過程で舞鶴は軍港として発展し、敗戦で軍港であることを止めた。次いで日本が米軍の占領下におかれると、舞鶴にも米軍が駐屯するに至つた。昭和二十五年

がいささかえらそうなことを述べて恐縮であるが、これも民主的で科学的な歴史教育を一歩でもすすめたいと思つて記したので、あえて御容赦願いたい。

観音寺の仏像

埋もれた文化財を調査するため舞鶴を訪れた荒尾府文化財保護課長ら調査団の一行は、八月八日、同市観音寺にある真言宗観音寺の「大日如来座像」「千手観音像」等を調査した。こんどの調査は、舞鶴市文化財保護委員会があらがじめ調査していたものの中から目ぼしいものを同調査団の一行に再調査してもらつたもので、この日の調査の結果、大日如来座像は鎌倉末期の作と断定された。座像は高さ四三センチ、膝幅三三・五センチの切り金彩色で、手は智拳印を結んでいる。また本尊の千手観音像は高さが一〇六センチもある立派なものだが、後世、着色しなおし、金粉を塗っているため、文化財としての価値が半減していると調査団は残念がっていた。その外、同寺の石灯ろう（高二一〇センチ）梵鐘（高八七センチ）のいずれも鎌倉期のもので、舞鶴市の文化財に指定しても価値のあるものと折り紙がつけられた。

（京都新聞 八月九日）